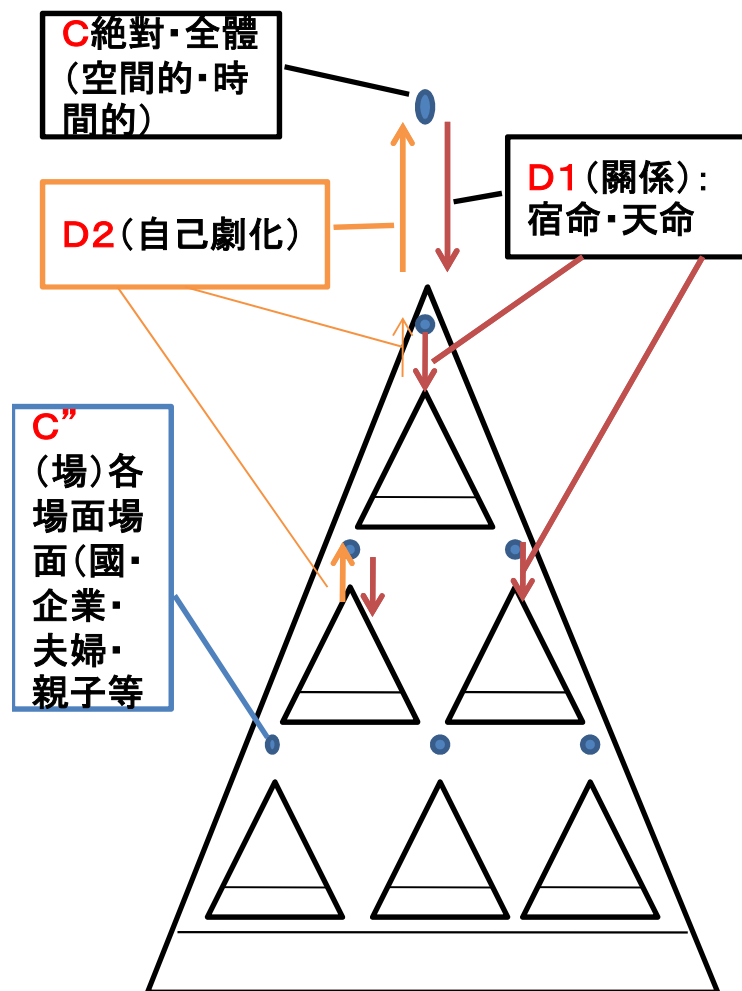


「完成せる統一體としての人格」

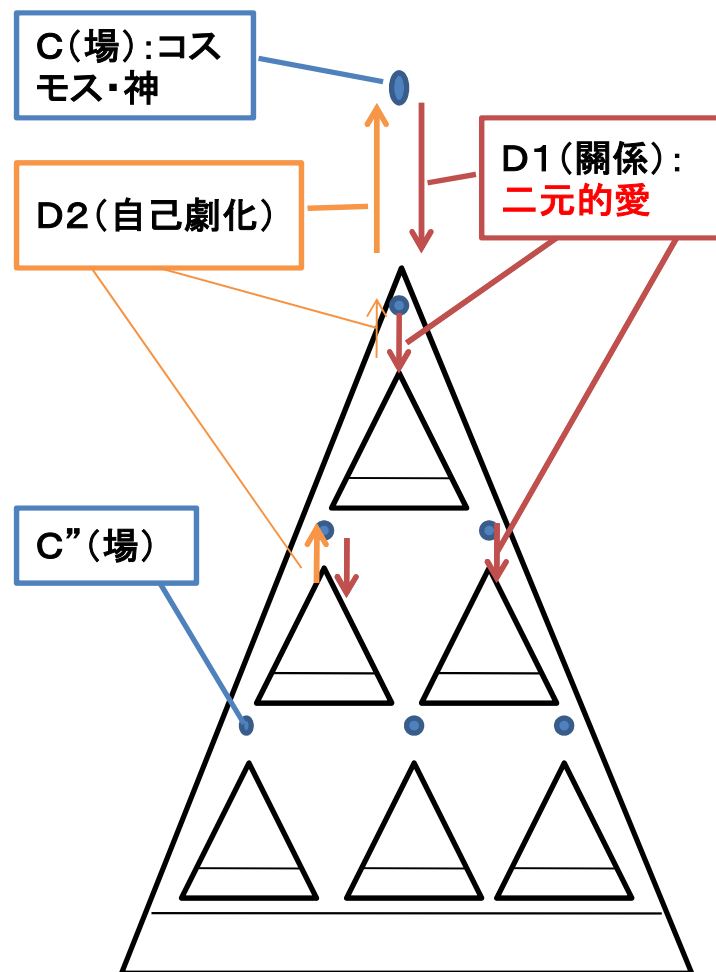
「國民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集團的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一體たらしめる原動力は何かといふ事である。それは純粋な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力(時間的全體・空間的全體:小生注)に繋つてゐなければ、人格は崩壊する」



〔左圖、「完成せる統一體としての人格」論、難解部分の、恒存原文による補足〕

「一般の日本人は、自分の子供が戦場に駆り立てられ、殺されるのが嫌だからと言って、戦争に反対し、軍隊に反撥し、徴兵制度を否定する。が、これは『母親』の感情である。その点は『父親』でも同じであらう、が、『父親』は論理の筋道を立てる。國家(場面)といふフィクションを成り立たせるためには、子供が戦場に駆り立てられるのも止むを得ないと考へ、そのための制度もまたフィクションとして認める。が、彼にも感情がある。自分の子供だけは徴兵されないように小細工するかも知れぬ。私はそれもまた可と考へる。『父親』の人格の中には國民としての假面(役・自己劇化)と親としての假面と二つがあり、一人でその二役を演じ分けてゐるだけの事である。そして、その假面の使い分けを一つの完成した統一體として為し得るものが人格なのである。『私たちはしつかりしてゐない』といふ自覺が、『私たち』をしつかりさせてくれる別次元のフィクションとしての國家や防衛を要請するのである、要するに人格も法も國家も、すべてはフィクションなのであり、迫持(せりもち)、控へ壁などの備へによつて、その崩壊を防ぎ、努めてその維持を工夫しなければならぬものである」(P703 全6『覺書』)「問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買つてゐる國民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集團的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一體たらしめる原動力は何かといふ事である。それは純粋な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力(時間的全體・空間的全體:小生注)に繋つてゐなければ、人格は崩壊する。現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」(全集六P703~4『覺書』)と。二役のみならず何役(國民の一人、公務員の一人、家族の一人)、を操る「自己劇化」が出来得る人格として、「完成せる統一體としての人格」論がそこに登場するのである。何役かを操る「自己劇化」を別な表現では、各場面場面で關係的眞實を生かしていくのだ、との内容で言つてゐる。その究極が「完成せる統一體としての人格」なのだ。以下恒存の文を索引しながらその内容を記載する。括弧内は小生注である。何役かを操る各場面場面でそこから発生する、關係の「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(役を演ずる・自己劇化)」「演戲なしには人生は成り立たない。つまり假説なしには成り立たない」。「眞實といふのは、ひとつの關係の中にある。個々の實體よりはその關係の方が先に存在している。人生といふものは、關係(目上⇄目下・親⇄子・師⇄弟子・國⇄國民、等々)が眞實なんで、一生涯自分のおかれた關係の中でもつて動いてゐる。いろいろな關係を處理していき、それらの集積された關係がその人の生涯といふもの。それを私は演戲だといふ」「われわれがこしらへたものは、相對的であつて絶對ではないといふ原理をちやんと心得て、こいつを絶對化(假説の完壁化・築城の完壁化)しようといふ努力」。(單行本『生き甲斐といふ事』中、對談「反近代につひて」P195・199)即ち要約すれば、各場面場面(國・企業・夫婦・親子・家庭・兄弟・師弟・友達・他者・等)から生ずる、關係と言ふ眞實(目上⇄目下・親⇄子・師⇄弟子・國⇄國民、等々)。その「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(「誠實・至誠・愛・慈悲」等と言ふ名の宿命的役を演ずる:自己劇化)」。さうした行動の中に、しかもそれが典型として「テキスト十圖」の如く「假説の完壁化」が果たせられた場合に、「完成せる統一體としての人格」が現成するのである。しるべきは、

愛(ロレンスの場合は二元的愛)は、場(C及びC")から生ずる「関係:D1」。
 基督教で言へば、「神が人間を愛する如く、人間も隣人を愛せよ」(神意・関係)。



《ロレンスの二元論と恒存「完成せる統一體としての人格」論との關聯》

DHロレンスの二元的愛とは……「吾々は生きて肉(A)のうちにあり、また生々たる實體をもつたコスモス(C)の一部であるといふ歡喜に陶醉すべきではなからうか」「吾々の欲することは、虚偽の非有機的な結合を、殊に金銭と相つらなる結合を打ち毀し、コスモス、日輪、大地との結合(C)、人類、國民、家族との生きた有機的な結合(A)をふたゝびこの世に打ち樹てることにある。まづ日輪と(C)共に始めよ、さうすればほかのことは徐々に、徐々に繼起してくるであらう」(『アポカリプス論』最終章)

上文及びロレンス思想要約の本論四十頁最終部分「自律性はうちにもとめるべきではない……」云々を、恒存の言葉で表現したのが「完成せる統一體としての人格」論(「テキスト」十頁圖)と小生は思へるのである。恒存は「前近代」と言ふ日本的桎梏を打破する爲に、日本人への遺言として「全集六『覺書』」に再度それを纏めたのではなからうか。ただ兩者の違いは、「愛は迂路をとらねばならぬ」と言ひ「その迂路をば宇宙の根源(コスモス:C)を通じること」とロレンスが主張したに對し、恒存は「全體・絶對:C」と言ふに留め、何を選択するかを各自の判斷に委ねた點である。尚、「完成せる統一體としての人格」論は「全集六P703~4『覺書』」を纏めての小生の用語である。

二役のみならず何役(國民の一人、公務員の一人、家族の一人)、を操る「自己劇化」が出来得る人格として、「完成せる統一體としての人格」論がそこに登場するのである。何役かを操る「自己劇化」を別な表現では、各場面場面で關係的眞實を生かしていくのだ、との内容で言つてゐる。その究極が「完成せる統一體としての人格」なのだ。以下恒存の文を索引しながらその内容を記載する。括弧内は小生注である(「テキスト」十頁圖及び十一頁圖:参照)。**何役かを操る各場面でそこから發生する、關係の「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(役を演ずる・自己劇化)」**「演戲なしには人生は成り立たない。つまり假説なしには成り立たない」。「眞實といふのは、ひとつの關係の中にある。個々の實體よりはその關係の方が先に存在している。人生といふものは、關係(目上⇄目下・親⇄子・師⇄弟子・國⇄國民、等々)が眞實なんで、一生涯自分のおかれた關係の中でもつて動いてゐる。いろいろな關係を處理していき、それらの集積された關係がその人の生涯といふもの。それを私は演戲だといふ」「われわれがこしらへたものは、相對的であつて絶對ではないといふ原理をちゃんと心得て、こいつを絶對化(假説の完壁化・築城の完壁化)しようといふ努力」。(單行本『生き甲斐といふ事』中、對談「反近代につひて」P195・199)即ち要約すれば、**各場面場面(國・企業・夫婦・親子・家庭・兄弟・師弟・友達・他者・等)から生ずる、關係と言ふ眞實(目上⇄目下・親⇄子・師⇄弟子・國⇄國民、等々)。**その「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(「誠實・至誠・愛・慈悲」等と言ふ名の宿命的役を演ずる:自己劇化)」。**さうした行動の中に、しかもそれが典型として「テキスト十頁圖」の如く「假説の完壁化」が果たせられた場合に、「完成せる統一體としての人格」が現成するのである、と恒存は言ふ。**